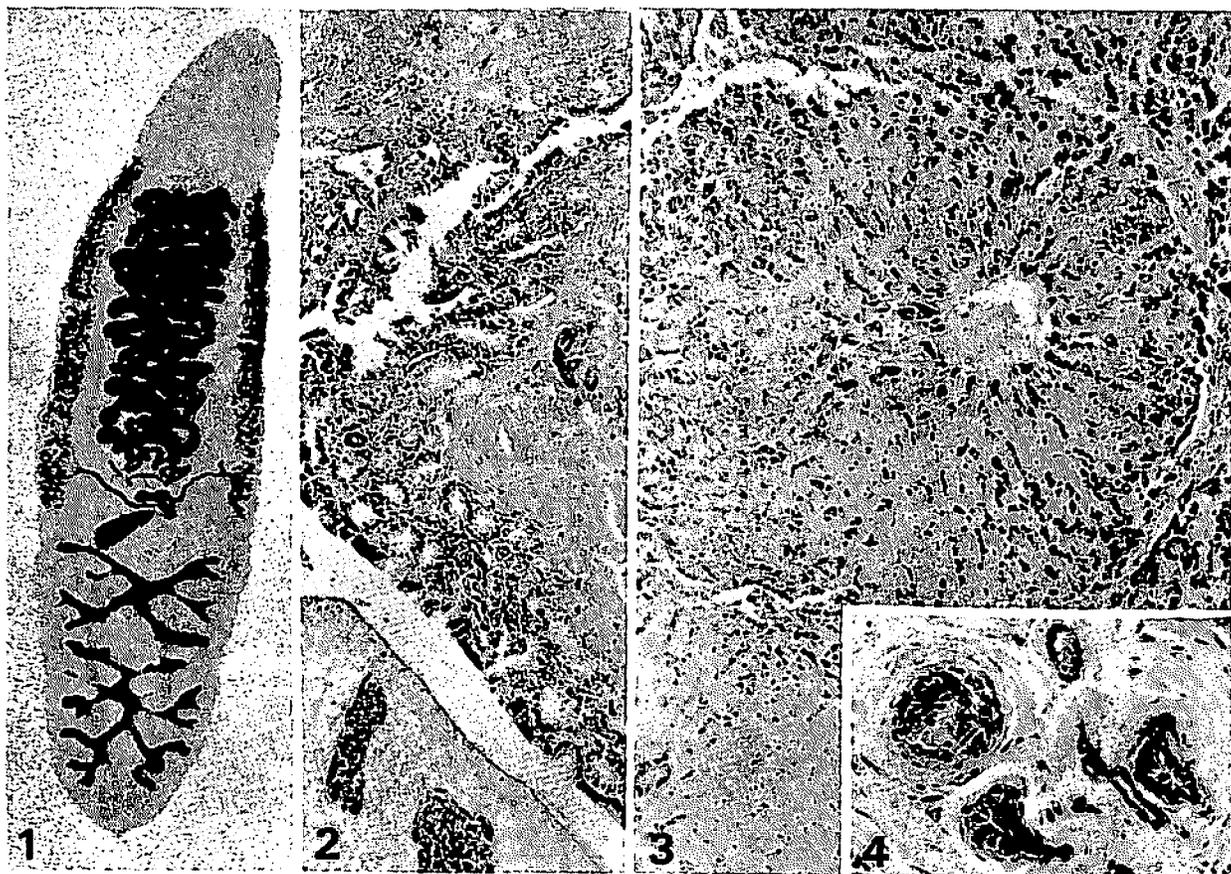


猫のアミロイド症と肝吸虫寄生による慢性胆管炎の合併

山口大学農学部家畜病理学教室出題 第12回獣医病理研修会標本 No.174



患畜は7才の日本在来種の雄猫である。既往症としては年に2、3回咬傷による化膿巣の治療をこゝ数年間くり返していたほか、昭和44年12月には黄疸になったことがある。昭和46年5月初旬、食欲不振、嘔吐を主訴として上診。対症療法により一時快方にむかったが6月下旬悪化、同29日早朝斃死し午後剖検に附された。

極めて消瘦した屍体で、開腹すると、硬さを増し、著明に腫大した肝が目目された。表面から灰白色樹枝状紋理が明瞭にみられ、断面を作ると、拡張した管腔内に長さ約10mm、巾2～3mmの吸虫が多数寄生している。この吸虫は精巢の形状から肝吸虫 *Clonorchis sinensis* と同定された(写真1. 約9.5倍)

提出した肝の標本には2種類の組織学的変化が観察された。その一つは肝吸虫寄生による慢性胆管炎の像で、拡張した管腔の内面を内張りする上皮は大部分で脱落消失しているが、腺性増殖を示す部位もみられた(写真2. H-E)。しかしながら肝蛭寄生の牛の肝に通常みられるような好酸球浸潤、間質結合織の増加、偽胆管形成などの所見はみられなかった。

もう一つの所見は著明な amyloid の沈着である。Hematoxylin-eosin 染色標本で類洞内皮と肝細胞索の間に eosin で淡染する物質の沈着がみられ(写真3.)、同物質は、van Gieson, congo-red, PAS, cresylechit violet と toluidine blue による metachromasia の所見などから amyloid と同定された。肝における同物質の沈着は間質の小動脈壁(写真4. C. V.)や腺性増殖した胆管の間質結合織にも認められ、肝以外に、腎、膵、十二指腸、副腎、脾、心などにも程度の差はあるが明瞭に沈着が証明された。

家畜のアミロイド症は一般に考えられているほどまれな疾病ではないといわれるが、猫では比較的少ないようで、わが国における報告例としては中松らの一例報告があるにすぎない。またアミロイド症の誘因としては、結核、慢性化膿性疾患、骨髄腫やその他慢性疾患が指摘されているが、現在まで、寄生虫感染が誘因と考えられた症例はないようである。よって、本症例における全身性アミロイド症の誘因としては、こゝ数年間くり返された咬傷による化膿巣の存在を重視すべきで、肝吸虫寄生との間に因果関係をもとめるのは早計のように思われる。